

算命学中庸

【初年】 4 5 回目

4 5 回目の授業はこのページからです。

授業科目 【十二大従星力学】 ⑤

【初年】 4 5 回目 【十二大従星力学⑤】 01

□ 十二大従星力学（じゅうにだいじゅうせいりきがく） ⑤回目

⇒ 天胡星（てんゆめせい）

天胡星 — 病人

天胡星は病人の星です。この時代は老人の時代のつぎの時代です。病人といっても、風邪を引いて寝込んで

いるとかではなくて“死の病”の時代です。

死ぬ一歩手前で病^{びょうしやう}床^ふに臥しています。

死の病の時代

死^しの病^{やまい}に罹^{かか}って床^{とこ}に臥^ふしている時代を意味しますが、
肉体と精神を分けて考えますと、この時代の特徴が見
えてきます。

死の病の時代ですから、肉体は弱です。

もう身体は満足に動かないし、自分の力で歩くことも
できない時代です。

肉体 — 弱（最弱）

〔たとえば〕天胡星の肉体は、小さな子供と比べても
“弱い”のです。一生のなかで最弱といえる時代です
ところが、死の病床で衰^{おとろ}えた肉体のように、精神まで
一緒に衰えてはいないのです。

つまり、肉体に比べると精神は“強い”です。

肉体 — 弱（最弱）

精神 — 強

精神はまだしっかりしています。

普段、病気になったときでも苦しいわけです。

風邪を引いて、熱が高ければ頭も痛い、喉も痛い、咳もでます。

どの病気でも、苦しくて辛い^{つら}のですが——肉体が病気になっても、精神は病んでいません。

精神はしっかりしています。ゆえに苦しいのです。

肉体が病気で衰えたときに、精神も一緒に衰えてくれれば苦しくないし、辛^{つら}く感じないはずです。

肉体は最弱にまで衰えているのに、精神のほうはまだしっかりしています。

算命学は、この時代に限らず、精神（心^{こころ}）は歳を取らないと考えています。

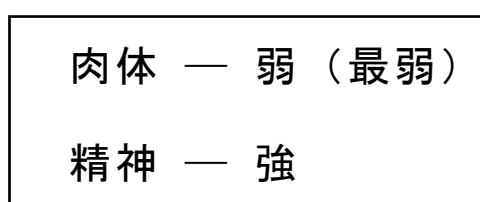
皆さまも、自分が若い頃の精神と、現在^{いま}の精神の働きを比べるときに、自分が何歳になったとわかっていますから、精神も衰えたという自覚があるかと思いますが、本質的に心・精神は若い頃とそれほど変わっていないはずです。肉体が疲れると、精神は疲れたという作用^{およ}を及ぼします。

肉体が衰^{おとろ}えると、疲れた、年^{とし}を取ったとか、そのような気持ちが心に作用して、気力にも影響をおよぼすわけです。

そうではありませんか……口では「私もう歳だから」という人も、本当に精神まで老け込んでいるわけではないはずです。

☞ 天胡星の特徴があります。

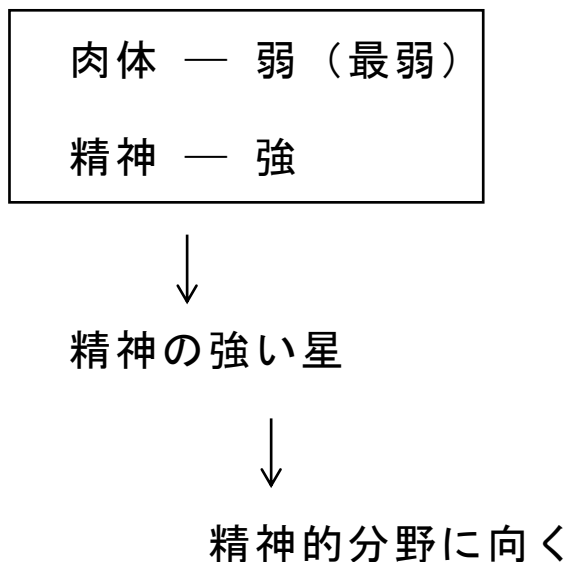
肉体は衰えてしまい動かないけれども、精神はゆるぎない（しっかりしている）わけですから、精神の質が強い星です。



精神の強い星

病^{やまい}を患^{わずら}って臥^ふしていますから、肉体のエネルギーはないので、肉体をつかう仕事はそれほど得意ではないのです。でも、精神はまだしっかりしていますから、

仕事などは、精神的分野に向いています。



芸術的分野、学問的分野、そのような精神のはたらきを必要とする分野に向いています。

ちよつかんりよく 直感力があり、かんじゅせい 感受性の強い星です。

直感力・感受性

これらは『天胡星』の特徴です。

参考・分野 [知的活動も含めて、ものごとの方面。範囲]

参考・直感 [説明や証明を経^へずに、物事の真相^{しんそう}を心で感じ知ること]

参考・感受性 [外界の印象を受けとる能力。ものを感じ取る感性]

病気になったときには、その病気の患部^{かんぶ}・悪い箇所に神経が集中しやすいはずです。

虫歯とかで、歯がいたいときに、「歯が痛い虫歯……」
そう思ってしまくと、そこばかりが気になります。

歯に神経が集中して、ちょっと痛むと、過敏^{かびん}に反応してしまふわけです。

そのような感受性・直感力を備えています。

天胡星の肉体は最弱に衰えても、精神はしたたかさを維持していますので、物事の企画・立案をするとかのチカラを備えている星です。

計画・企画力がある



実行力に欠ける

そういうことが得意ですし、そのチカラはあるのですが、なにぶんにも病床に臥して、体が動かないし、エネルギーも弱い時代ですから、自分で立てた計画などを実行する体力がないのです。

それゆえに、現実面に欠点を出しやすい星です。

現実面の一番、身近なところでは、実際の生活です。

実生活に関する事柄に対処する質は不足していますので、そこに欠点が出るのです。

現実的な事柄に欠点を出しやすい

精神的な分野に強いという意味では……、

〔たとえば〕 こういう雰囲気のお店にしたい、こんな色調の部屋にしたい、と思えば、他人が想いつかないような雰囲気のあるお店なり、部屋にしてしまおうとか、そのような能力があるわけです。

実生活においては、〔たとえば〕 部屋のここだと決めた箇所に、キッチンとあるべきものを収納するとか、そのようなことは弱いといえるでしょう。

精神性は強いのですが、現実的なことはあまり得意ではないのです。

参考・対処 [ある事態・情勢に対応して処理すること]

参考・質 [本来の性質で人為・飾りが加えられていない]

算命学は『肉体』と『精神』を、二つに分けるときは、
 肉体を（陰）として、精神を（陽）として、陰と陽を
 区別して考えます。

—（陰）	肉体 — 弱（最弱）
＋（陽）	精神 — 強

陰陽いんようには、つぎのような特徴があります。

〔たとえば〕人間が物事をじっくりと考えるとき……
 一生懸命に何かを考えているとき……身体はどのよう
 になっていますでしょうか？

ロダンの彫刻のように、からだは動かないですね。
 体操をしながら、ものごとを考えたりできません。

〔星によっては、体を動かしているときに、アイデアの閃ひらめき
 がある。そういうことはありますが、その星も動いていると
 きは、じっくりと深く考えることできないはずです〕

ものを考えるときに、腕を組んだり、足を組んだりし
 て一生懸命に考えているときに、身体を動かすことは

ほとんどないでしょう。

精神を鋭敏に駆使しているようなとき、肉体は静止しています。

それでは、肉体を激しく動かしているとき、精神はどのように、はたらいているのでしょうか？

そう。考えていない。精神は空っぽですよ。

☞ 精神（心）を空っぽにする。⇒日蓮は「にちれん禅ぜん天てん魔ま」と示唆しきしています。

オリンピックなんかで、試合終了後にマラソン選手に報道関係者がインタビューで「自分でどんなことを考えて走りましたか？」と、訊きいたりしますが、コースの組み立て以外は、ほとんど考えていないはず。

肉体を限界まで酷使しているときには、物事の究極を考えることはできないでしょう。

精神を無意識に近い状態にしたほうが、体は動くわけです。このことを（陰）と（陽）の関係と考えていまして、精神を酷使しているときは、肉体を酷使できないのです。

参考・無意識（あることをしながら自分のしていることに気づかない）

……余談ですが、阿闍梨（あじゃり）と呼ばれる行者がいます。山の中を歩いたり、走ったりして、それはただ走るだけではなくて、経や念仏の意味を一生懸命考えながら走らなくてはいけないそうですが、経や念仏の意味を一生懸命考えながら、山中を走るということは、無理だと考えています。その修行が悪いというわけではありません。

⇒ 日蓮は「^{ぜんてんま}禅天魔」といっています。

「心を空っぽにした^{すき}隙に魔が入り込む」という意味です。人間の心の状態に応じて、魔界のものが入るということです。その人の心が、魔界に支配された状態で、心を無にすれば、それに呼応するかのよう、悪霊または動物霊が人間の心のなかに入り込むのです。つまり、悪霊が^{ひょうい}憑依します。悪霊・動物霊の世界から、私たちの三次元の世界は、丸見えです。当然、その人の考えていることも、わかりますから、それに呼応するかのよう、さまざまなことを教えてくれます。そこが^{ぎょう}行の怖いところです。

もちろんその人の意識の状態が、仏の慈愛に満ちた心の教えを実践していれば、あるいは、イエス様のように愛に満ちた心の状態であれば、その心持ちに応じて、実在界の守護神が

波動によって、より良き方向へ導^{みちび}いてくれるのです。

それは人間の心を光明の世界へ誘^{いざな}い、仏性^{ぶつしょう}・愛心^{あいしん}を高め、人間性を高め、真の人間として生きる道の教えといえます。

偉大なる慈愛に満ちた大宇宙の意思と……私利私欲^{しりしよく}を貪^{むさぼ}る

悪霊^{あくれい}とでは星辰^{せいしん}の違いといえるのです。

参考・星辰〔宇宙空間の星と星との距離〕

☞ 話をもどします

精神を酷使しているとき、肉体を酷使できないのです。こっちを動かすと、あちらが動かない、あっちを動かしているときは、こちらは動かないというように——肉体と精神は、そのような仕組みになっています。

そうしますと、『天胡星』の時代・死の病の時代は、病床に臥して、肉体が動かないわけです。

しかし、精神は普通の人以上に、鋭敏^{えいびん}に作用します。逆にいえば——肉体が動かなくなると、精神は活発になるといえでしょう。

参考・鋭敏〔物事に理解・判断がすばやいさま〕

〔たとえば〕^{じゅうとく}重篤^{やまい}な病で入院なされた経験のある方はご理解できるかと思います。

病院のベッドに寝ているとき、体は動かさせません。

そして、医師から「安静にしてください……」といわれたとき、自分なりに、病気について、さまざまな想いをめぐらすでしょう。

^{むねうち}胸内にいろいろな^{かんがい}感慨も湧き上がります。

普段は考えていないようなことまで思い起こします。

⇒ 勉強に前向きな子供であれば……。

〔たとえば〕骨折して学校をひと月休んだら、その間に成績上がるとかです。

病床なので、自分の時間はたっぷりあります。

肉体を動かさない代わりに、精神はいつもより働きます。そこで不得意な勉強をしたりすると、考える幅も広がります。そうすると、いままで解けなかった問題が解けたり、ヒントを得たりして、学校に復帰しときに、普段よりも成績上がるとか、そういうことは有り得るわけです。

〔ゲームばかりやっていたら話は別です〕

『天胡星』はほかの時代の星よりも、精神が強いので精神的分野に向いているのです。

普通の人よりも、直感力や感受性にすぐれます。

それに加えて、肉体が動かない分だけ、よけいに精神がはたらきます。

肉体が動かないので、精神はより活発にうごく

ここが天胡星をもつ人の良いところであるのですが、欠点にもなる部分でもあるのです。

肉体が動かないので、精神が活発に動くわけですから、精神のほうが、先行しやすい人になります。

肉体よりも、精神のほうが先行しやすい

つまり、精神のほうがより大きく膨らむので、精神が先走りしやすいのです。

算命学では、肉体を「現実」という言葉に置き換えて考えるわけです。

天胡星は現実より、精神が先行しやすいということでは、つぎのような傾向がでます。 ➡

〔たとえば〕 その現実を数字で表せば 10 でした。
現実 は 〈10〉 だったのに、それを自分の精神（心）のなかで、大きく膨らませて……それが 〈20〉 もあったかのように、他人に話してしまう傾向があるのです。

〔たとえば〕 先週の土曜日「ドコドコへ遊びに行ったら、すごく楽しかったの」と話したとします。
本当は 〈10〉 楽しかったんだけど、それを自分の精神のなかで、〈20〉 に膨らませて、倍の 〈20〉 楽しかったというように表現してしまうとかです。

逆の場合もあります。

あのときは「すごく苦しかったわ」実際に苦しかったのは 〈5〉 くらい辛かったのに、もっと辛くて、もっと苦しくて……と、そういう出来事に置き換わってしまって、精神のほうが先行してしまう、膨らんでしまう、そういう傾向があります。

それゆえに、悪くいえば、おおぶろしき 大風呂敷を広げます。

嘘つきとは違いますが、大げさ、オーバーな人です。

嘘じゃないんです——漫才や落語のように、大風呂敷、大げさな人物になる可能性をもっています。

そうしますと『天胡星』をもつ人が、すごく感情的になっているとき、あるいは、興奮してしゃべっているときは、その話を半分位にして聞いておかないと……嘘ではないのですが、実際よりも大げさに表現してしまうわけです。

嘘つきとは違いますが、そういう質をもっています。

普通、自分にとって都合の悪いことは、誇張して表現はしないものです。

そういうことは本能的にしませんよね。

実際には、都合の悪いことであっても、なるべく都合よく話を膨らませてしまう。そのようになるはずです。

そのような性質は、言葉を換えれば〔自己顕示欲〕が強い人だということです。

自己顕示欲

天胡星は自己顕示欲が強いと考えておけばよいです。
これも天胡星の特徴なのです。

どなたでも、自分を少しでもよく見せたい、より良く
見てもらいたい、そういう本能はあるでしょうけど、
天胡星の場合は、現実よりも精神のほうが先行してし
まうので、普通の人よりも膨らみやすいわけです。

自分を良く見せようという気持ち^{ひと}が、他人より強くで
やすいのです。

“自己顕示欲が強い人”だということも、天胡星の特徴
なのです。

その自己顕示欲が、変わり者、異端者^{いたんしゃ}、理想主義者、
演技屋、キザな人と、いうふうに見られるわけです。

その自己顕示の出し方によって、ときにはキザな人と
見えたり、すごい理想主義者だ見えたり、変わり者
に見えたりと、出方がまちまちになります。

その変化する出方の大元^{おおもと}になるのが、自己顕示欲とい
う質だといえるのです。

天胡星がもつ自己顕示欲が最も強く出た場合、しかも、最も悪く出た場合は、自殺ということもあり得ます。もちろん、天胡星をもっている人が、みんな自殺するわけではありません。

そうなる人はごくごく一部なのですが、自己顕示欲が非常に悪くでると、自殺につながる可能性もあります。

自己顕示欲



悪くでると自殺または自殺未遂

最も悪く出た場合ですよ。

自殺未遂の場合もありますから、未遂と入れておきましょう。

自殺・自殺未遂の動機は、自己顕示欲に起因しますので、この星がそのような精神状態におちい陥るときには——「相手に思い知らせてやろう」と、そういう動機なのです。

「たとえば」彼氏に振られて、別れたくないのに彼氏が去って行った——そうすると手首を切るわけです。

それはホントに死にたいのではなくて、相手に自分の存在を“知らしめたい”という欲求なわけです。

自殺は“最も悪い出方”です。

そこまで行かない場合のほうが多いのですが……。

〔たとえば〕天胡星をもっている子供が、親とケンカしたり、親とうまくいかなかったりして、^{いえで}家出したとすれば、その理由は“親に思い知らせてやろう”というのが目的です。

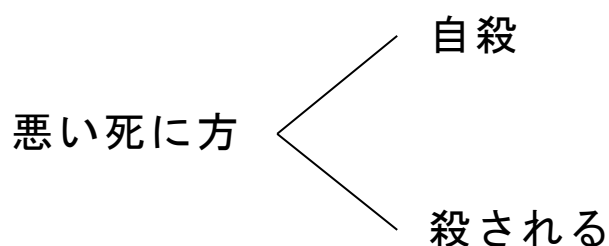
本当に家から出たいのではなくて、自分が居なくなれば困るだろうという自己顕示欲、自意識が過剰なためにするわけです。

自分が家出したことで、親に自分の存在をわからせてやろうという自意識、自分の存在をことさらに目立たせようとする自己顕示に起因しています。

これは天胡星の質が悪く出る場合ですが、自己顕示欲の質が悪く出てしまうと、上記に挙げた動機につながりますので、感情の捌け口^{はぐち}を理解してあげると、その問題は解決しやすいのです。

天胡星はこのような特異とくいな質を内在している星です。
自殺は逃避とうひであり、人間否定、自己否定を意味しますから“最悪の死に方”です。

算命学には「悪い死に方」いうのがあります。
それは2つあります。



悪い死に方は天胡星だけに限った話ではありません。
どの宿命の人にも、全般にいえる話です。

1つは自殺です。

1つは殺されることです。

この2つが算命学で考える“最も悪い死に方”です。
2つの死に方の位置づけは、おなじくらい悪い死に方である。と考えています。

参考・特異 [ほかと非常に異なっている]

❖ なぜ“悪い死に方”なのかを少し説明します。

まず——自殺です。

算命学は、人間は自然物だとする基本があります。

人間は自然物である

算命学は人間がこの世に生れて来るときに——

自分の意思で生れて来る人はいない

親の意志で生れて来るわけでもない

人間は自然の意志で生れて来る

考えています
このように

親が子供を欲しいからといって、出来るのかといえば必ずしも出来るとは決まっていません。

欲しいと思ってもなかなか出来ない、ということもあります。

子供が欲しくてもできないご夫婦はたくさんいます。

反対に、欲しくないと思っても、出来ちゃうときもあります。

中庸学は「子は親を選んで生まれてくる」と論じます……

その^{ことわり}理は省きます。算命学とは違います。

自殺・死後の苦しみ

「耐えがたい苦しみという束縛から解かれて、幸せになれる、楽になれる」と、想うのですが、自殺者の死後はそうではないのです。

実態^{じったい}のわからないものが、自殺者の混沌^{こんとん}とした意識のなかに入り込んでいきます。地獄のウジ虫ともいえるものが這いずりまわり、じくじくと蠢^{うごめ}いて、^か ^{みだ} ^は ころを掻き乱します。

強烈な耳鳴りが響^{ひび}き、恐怖の苦しみが心のなかで渦を巻いて掻きむしります。鋭い頭痛^{さいな}に苛^{さいな}まれ、眠ることもできない、自分の居場所もわからない、真っ暗な闇^{やみ}の世界です。

自殺は自己の存在を否定する極点^{きょくてん}の行為です。

悪^{ようそう}の様相のなかで、最悪の悪とされる悪行^{あくぎょう}が自殺なのです。

闇と光を陰陽^{いんよう}でいえば、自殺は光を閉ざしてしまう行為です。

自殺者の死後は、光^{ひかり}がまったく無い暗黒地獄^なです。

光を否定した自殺者の死後は、闇^{やみ}の穴^{あな}のなかで葛藤^{かつとう}と苦悶^{くもん}に襲^{もんもん}われながら悶々と過ごすのです。心に光がとどくまで……

命^{いのち}を絶^たった過^{あやま}ちに気づくまで……際限なく続きます。

どうぞ生き抜いてください。

高橋信次著より抜粋

参考・生き抜く〔苦しみや困難を乗り越えて、どこまでも生き通す〕

⇒ 話はもどります ⇒ 20 頁の続きです。

それでは誰の意志で生まれるかといえば、算命学は、人間は自然物だから、自然がその人を必要としたから、その人が生れて来るといふ自然思想の考え方をしているわけです。

算命学の考え方に異論のある方もおられるかもしれません。

それは^{いま}現在、生きているのは、自然が与えてくれた命であり、自然が何らかの役目を与えてくれて、自分は生かされているのだとする考え方です。

自然から命を与えられて、自分は生かされている存在なのに、自分の命を絶つ自殺は、自然に反する悪い死に方だと考えているのです。

“人間は自然物である” 自分の命は自然が与えてくれたもの



自分で自分の命を絶つことは、自然に反する死に方である

算命学は、宗教と違いますので、宗教と大きく異なる点としては――善悪の基準も、それが自然に反するのかどうかで、善か悪かを考えるのです。

〔たとえば〕 ボランティア活動を一生懸命やっています。世の中の恵まれない人達をたくさん助けているという慈善の生き方している人でも、その行為自体が、自然に反する行為かも知れないわけです。

もしかしたらですけど……その人物はそういう役目を果たすために、生れて来たのではないかも知れないのです。そうだとしたら、その人物が他人^{ひと}を助ける行為は自然に反する行為なので「悪い結果につながりますよ」そのように考えていくわけです。

〔たとえば〕 世の中には「どうしてなのかしら、あんなにいい人が死んでしまうなんて——」ということもありますよね。

算命学は、それには必ず、理由があると考えているのです。

それが占いになるわけです。

参考・慈善〔困っている人をあわれみいつくしむこと〕

＊ マザー・テレサ 1910-8-26 [1997-9-5 没] 87歳

	癸	甲	庚		玉堂星	天堂星	7 癸未
子	亥	申	戊	石門星	玉堂星	牽牛星	17 壬午
丑		戊	辛	天将星	調舒星	天極星	27 辛巳
	甲	壬	丁				37 庚辰
	壬	庚	戊				47 己卯
							57 戊寅
							67 丁丑
							77 丙子
							87 乙亥

中庸学

「マザー・テレサ」自らに与えられた使命を見事に果たして、自分の次元の世界へ帰って行きました。

そうでなければ、彼女は若くして死んでいます。

まさに、主星〔玉堂星〕 従星〔天将星〕の生き方です。

[1910-8-26～1997-9-5] 87歳没

彼女は菩薩界以上の段階の魂^{たましい}なのです。中庸学^{ぼさつかい}

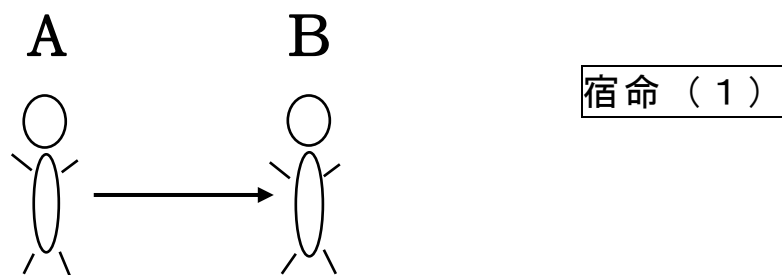
☞ 殺されて死ぬ——算命学

つぎの〔例え〕のほうがわかりやすいと思うのですが、殺されて死ぬのは、自分の意志で死んだのではないわけです。

何も悪い事をしていないのに、殺されて死ぬ人だっているじゃないか、それなのに、なぜ自殺とおなじ^{くらい}位に、悪い死に方なのか。と思われるかも知れません。

算命学ではつぎのように考えています。

〔たとえば〕 Aさんと Bさん、二人いたとして——、Aさんが、Bさんを殺したとします。



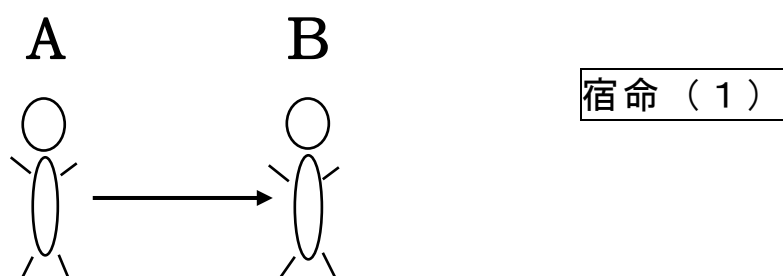
このとき、Aの犯した行為から考えますと……、どのような理由があるのかわからないけど、AはBを殺してしまったわけです。

Aさんの意志で、Bさんという人間が生まれて来たのではありません。

そして、Bさんも、自分の意志で、この世に生まれたわけではない。このように算命学は考えています。

自然がBさんを必要としたから、Bさんがこの世に生れて来たわけです。(自然思想の考え方)

それなのに、Aさんの勝手(自分の都合で)で、Bさんを殺してしまった。ということは、自然に反する行為だと考えるわけです。



AがBを殺した

自然がBに命を与えてくれた。

そのBを殺したAの行為は、自然に反する。

さきほどの“人間は自然物である”とおなじ理屈です。

自然が生み出した B を殺した A の行為は、自然に反するものであると考えているのです。

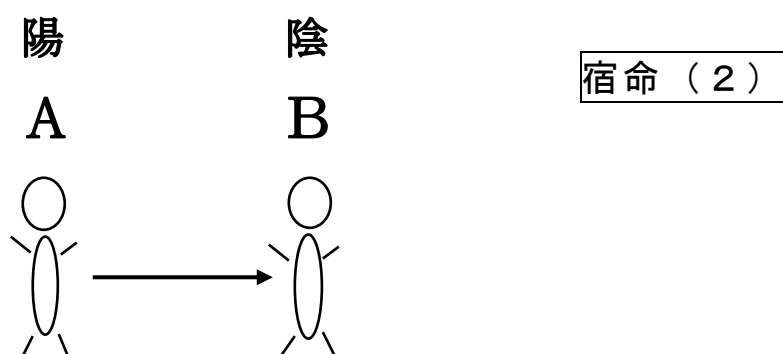
B さんという人間は、B さんの勝手に生まれて来たのではない。A さんも自分の勝手に生れて来たわけではない、自然の意志で生れてきた。それであるのに、どのような理由があろうと B さんを殺してしまったという、A の犯した行為は自然に反する。

この考え方が自然思想に基^{もと}づく算命学の考え方です。

このときに、陰陽論^{おんようろん}ではつぎのように考えます。

宿命(2) で A と B を書きましたが、A と B のどちらが(陰)でも(陽)でも構いません。

殺人を犯した A さんを(陽)としたら、B さんは(陰)となります。



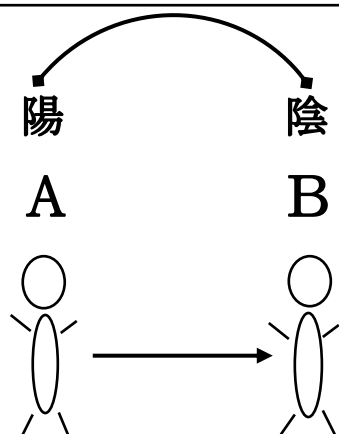
A が B を殺した

下記 **宿命 (3)** のように、殺した側と、殺された側とのあいだで、陰と陽の関係が成り立つと考えます。

おんようろん

陰陽論は原則として、(陰) と (陽) が、ともに存在することで成り立ちます。

A と B は共に存在して成り立つ



宿命 (3)

A が B を殺した

ここは陰陽論の考え方です。

陰と陽のどちらが欠けても、この出来事は成り立たないわけです。

つまり、B さんを殺した、A さんの行為は悪い行為だけど、B さんが殺されなかったら、A さんは殺人犯にならずに済んだわけです。

B が殺されたから、A は人殺しになったわけです。

〔たとえば〕このときに、Bさんが逃げていれば——
Aさんも人殺しにならなくて済んだわけです。

BがAに殺されたから、Aは人殺しになりました。

Aが殺さなかったら、殺人は起きなかった。

Bが殺されなくても、殺人は起きなかった。

当たり前のことです。

当たり前のことですが、この2つは、陽と陰の関係で
すから「同等・対等の関係であって、どちらもが同等
に悪い」とします。どちらもおなじだけ悪いのです。

Aが悪いのなら、Bも悪い、このように算命学は考
えるのです。

ご異論のある方もおいでになるかも知れませんが——これは
あくまでも算命学の考え方です。

☞ 算命学はこの事象に限ったことではなく、何事にも
陰陽論を基^{もと}にして考えていくのです。

〔たとえば〕男性と女性は同等・対等であると考えて
います。上下の差はないのです。

ただし……男と女では、役目が異なるとしています。

このことについては勉強する機会がございます。

以前テレビで、もと、空き巣で前科何十犯という人物が、空き巣の手口を説明したそうです。

こういう家は狙われやすいとか、この家はこのような所に鍵が隠してあるとか、それはすぐわかるそうです。町をまわって、目につく一軒、一軒の弱点を説明したのです。

もと空き巣の人物がいうには〔盗むほうも悪いけど〕

〔盗まれる家も悪い〕 そのようにいったのです。

その空き巣の言い分が 100%正しいとはいえませんが、算命学もそれに類似した考え方をするので。

……浮気なんかもそうです。

「夫が浮気して離婚することになりました」といっても〔浮気した夫も悪いけど〕〔浮気された妻も悪い〕のです。

法律的には妻は悪くないかもしれませんが、算命学は、するほうも、されるほうも同等だと考えるのです。

浮気する夫にも、浮気された妻にも、おなじだけ原因があるとしています。

〔たとえば〕かなり前ですが——芸能人・田代まさしさんは、何回も盗撮・のぞきで捕まったり、覚醒剤で捕まったりと、確かに、田代まさしが悪いのですが、夫があのようになるのは、夫をそこまで追い詰めてしまった妻にも、おなじだけ原因があるということです。

田代まさしの妻は、真面目でしっかりした奥さんで、世間で悪妻と評される妻ではなかったのでしょう。

もしかしたら……真面目でしっかりした奥さんだったということに、原因があるかもしれないわけです。

奥さんが、もっとだらしない奥さん、あるいは悪妻といわれるようであったら、田代まさしも、あのようにならないで済んだかもしれないのです。

しかし、それだけでなくて、彼が育った環境も大きく影響していますし、彼が結婚した時期も影響していると考えます。

彼が選んだ芸能職業も影響しています。

田代まさしの宿命を観ると、そのように書いてあるのです。参考までに ➡

＊ 田代 まさし 1956(s31)-8-31

	庚	丙	丙		車騎星	天禄星	3 丁酉
戌	午	申	申	牽牛星	貫索星	貫索星	13 戊戌
亥		戊	戊	天恍星	車騎星	天禄星	23 己亥
	己	壬	壬				33 庚子
	丁	庚	庚				43 辛丑
							53 壬寅
							63 癸卯

1985 年〔29 歳〕 一般女性と結婚。

2000-9-24〔44 歳〕 東急東横線・都立大学駅で女性下着盗撮。

∞ “双方におなじだけ責任がある”

このことについては、個人対個人でなくて、戦争のような強制的な状況でも考え方はおなじです。

交通事故でいえば——事故を起こしたくて、事故を起こす人は、普通、まずいないとおもいます。

殺すつもりはなくて、人身事故で轢^ひいてしまったというのがほとんどでしょう。

交通事故死も、殺されて死ぬのとおなじです。

〔たとえば〕㉔と㉕の関係でいいますと……。

㉔は殺すつもりはなかったけど、よそ見をしていた、あるいは、スピードを出しすぎて、㉕を轢き殺してしまっただ。

㉔ 殺したほうに入ります。

㉕ 殺されたほうに入ります。

そのときの状況とか動機がどうであれ、自然から見れば関係ないのです。

車を運転していたことは、その人の勝手です。

自然が車を運転しなさいと、役目を与えたわけではないわけだ。

参考・動機 [人の意思決定や言動の直接的な原因・理由]

[行動や行為を決定する意識的・無意識的原因]

戦争を考えると、国が民間人に兵隊に行きなさいと、命令を下して、それに従うのは、その人の勝手です。つまり、自然ではなくて、人間が定めた基準だということ。国の勝手ですし、その人の勝手です。

曾我ひとみさんのご主人、ジェンキンスさんのように、脱走して、北朝鮮へ逃げてしまう人物もいるわけです。

戦争に行つて、誰かを殺したのなら、それは人を殺したことになる。そこのどんな理由があつてもです。上官の命令で、鉄砲を撃てといわれたので撃ちました。その弾が当たって敵が死んでも、それは鉄砲を撃った人物が殺したと算命学は考えています。

「軍隊に入って、紛争地へ行って、人を殺すという役目を自然が与えたわけではない」そのように考えているからです。

☞ 自然災害での死は異なります。

“人に殺される” ことと、まったく違います。

〔地震で亡くなった方〕とか、〔台風で亡くなった方〕とか、自然災害で亡くなるのは、それはある程度……自然の意志でもあります。これについては後で説明します。

死ぬつもりは無かったとか、死ぬつもりがあったとか、そのような人の意志とか理由は、まったく関係ないのです。

冬になると、毎年雪山で遭難して亡くなる人がおられます。そのような事故は、自分で勝手に冬山に行き、勝手に亡くなるわけです。

その姿は、実質自殺なのです。

死ぬつもりは無いでしょうけど、冬山は悪天候がいつ襲ってくるかわからないけど、そこへ登りなさいと、自然がその人物の宿命として、与えたわけではないのに、人物の勝手に冬登山をして、遭難に出会って死ぬ、それは自殺行為とおなじなのです。

本人は死ぬつもりはないでしょうけど、冬山に登山しなくても、人間は生きていけるのに、わざわざ登山しに行くのですから、死んだ場合は自殺になります。

——法律のうえでは、なにも悪い事をしていません。たまたま、運が悪くて亡くなっただけ。という解釈を世の中ではするのですが、算命学は世の中の解釈とか、法律も関係無いのです。

法律上では、この案件は殺人にはならない、正当防衛で殺人罪は適用されない。という場合であっても——殺されて死ねば、殺されて死んだことになります。正当防衛でも相手を殺せば、殺したことになります。（陰）と（陽）は対等なのです。

⇒ 飛行機に乗りました——パイロットの操縦ミスで飛行機が墜落して、乗客全員死にました。乗客全員が殺されて死んだことになります。そのパイロットの操縦ミスであろうと、何であろうと、パイロットに殺されたわけです。

もちろん、パイロットは乗客を殺すつもりで操縦したのでは無いでしょう。

無いのですが、飛行機というとても便利な乗り物を勝手に製造したのは人間です。

その飛行機を操縦して、勝手に墜落して、乗客も含めて死んだことは、それはあくまでも、人間が勝手にしたことであり、自然がそういう役目を求めたわけではないですよ。このような考え方をするので。

人間は自然物なのだから、自然に沿っての判断をしていく。という考え方です。

理不尽でご異論のある方もおられるでしょうが、算命学ではそのように考えるのです。

参考・^{りふじん}理不尽 [すじみちの通らないこと。道理にあわないこと]

参考・^{どうり}道理 [物事のそうあるべきこと。正しい論理]

☞ パイロットの自殺に巻き込まれて、アルプスに激突したのが、ジャーマンウイングス墜落事故です。

✽ アンドレアス・ルビッツ〔副操縦士〕 1987-12-18

	辛	壬	丁		車騎星	天馳星	4	辛亥
辰	丑	子	卯	貫索星	鳳閣星	禄存星	14	庚戌
巳	癸			天印星	調舒星	天貴星	24	己酉
	辛						34	戊申
	己	癸	乙				44	丁未
							54	丙午

2013「癸巳」6月、ジャーマンウイングス入社。

両親とガールフレンドと一緒に生活。

事故前日、7年間一緒に過ごしたガールフレンドと別れた。

2015-3-24 ⇒ アンドレアス・ルビッツ〔27歳〕副操縦士はスペインのバルセロナから、ドイツのデュッセルドルフ行き旅客機をフランス領内のアルプス中腹に激突させた。

乗客144名（スペインで修学旅行を終えた生徒16人と教師2人）乗員6名の150名が犠牲になった。

☞ [悪い死に方] [良い死に方]

良い死に方



老衰 [自然死]

最も良い死に方は老衰です。自然死です。

人間どんな人でも、必ず、死を迎えます。

歳を取れば、体のあちこちが衰えてきます。

〔たとえば〕心臓疾患の心筋梗塞で亡くなりました。

それは心筋梗塞が原因ですから、肝臓は死ぬ要因になるほど衰えていたわけではとないでしょう。

つまり、腎臓や肺臓とかの他臓器は、まだ何年も機能する状態だったはずです。

それらは自然が与えてくれた肝臓であり、腎臓であり、肺も、自然が与えてくれた五臓六腑であり肉体です。

ほかの臓器は、まだ丈夫なのにも関わらず、心筋梗塞で死んだということは、その人物の死に方は老衰ではないので自然死とはいいません。

算命学で考えている老衰というのは、心臓も肝臓も、ほかのすべての臓器を充分につかって、もうこれ以上は肉体を維持することはできない。というほどに使い切って他界するのが、厳密には老衰なのです。

そうだとすれば……実際の帰結として、完全な老衰で死ぬことはできません。無理だといいい切れます。

最も良い死に方は老衰・自然死なのですが、すべてを消費して使い切ってという定義で、死ぬことは無いわけです。

それゆえに、「なるべく老衰・自然死に近い死に方で、死ぬべきですよ」と考えているのです。

〔たとえば〕 90 歳の方がガンで亡くなりました。

90 歳という年齢からして、実質的に半分は老衰に近いようなものですから、そのような場合でしたら、医師の診断結果はガンであっても、老衰に近い死に方だと考えてもよいのです。

このように考えてください。

人間が死ぬときは、ほとんどの人が〔悪い死に方〕と〔良い死に方〕の中間地点の死に様^しで、死んでいるといえるでしょう。

ですから、皆様も死を迎えるときは、少しでも自然死に近いと考えられる死に方で、あの世へ向かってください。

安楽死を法律で認めている国もありますが、法律で認められていても、安楽死は“殺人”と算命学は考えているのです。

算命学は、人間がこの世で生きて行くときに、自然が与えてくれた宿命のとおり生きていくことが、その人物にとって、最も幸せな生き方になれますよ。という考え方をしているわけです。

自然に即した死に方、つまり、良い死に方をすると、死んだ後^{のち}——幸せになるのです。

自然に反する死に方、つまり、悪い死に方をすると、死んだ後^{のち}——苦しみます。

端的^{たんてき}に言えば「成仏できない」ということです。

悪い死に方をすると、死後に苦しみ、成仏できない

自然に反する死に方をしたのだから、自然の法則から除外されて、当然だと考えているのです。

そして、自然に反する死に方をすると、この世においても、子孫に^{いんねん}因縁を残します。

子孫に因縁を残す

悪い死に方をすると、子孫に因縁を残します。

算命学は、因縁についても、宿命から観てゆくことができますが、それは『因縁法』という高度な技法です。

この人は先祖からどのような因縁を与えられているのか、それに関連する事柄を占う技法です。高学年で学びますが、「殺傷因縁」「色情因縁」とかさまざまにあります。

それらの因縁は子孫へ伝わります。

子孫が因縁を消化するのか、しないのか、それで子孫の人生が曲がるのか、曲がらずに済むのか決まります。

個人に与えられた因縁を消化しないと、人生が曲がります。端的にいいますと……、

〔たとえば〕親が自殺すると、子供のなかに自殺する子供がでます。

——その子にとって、死の苦しみを消化する方法があるので。それが出来れば自殺しなくて済みます。

自然災害で亡くなる場合を考えますと…… 2004 年に起きた新潟の自然災害で、車に乗っていた三人が生き埋めになって、男の子だけが助かり、母親と女の子が亡くなりました。

お母さんは〔39 歳〕で、女の子は 3 歳か 4 歳でした。

⇒ 自然災害による死というのは“殺される”のほうには入っていません。

でも〔39 歳〕という若さで生き埋めになって死んだわけです。それはどちらのほうに近いのかと考えれば、自然な死に方とはいえないのです。

このような場合は、どちらかといえば〔悪い死に方〕に近い、というふうに考えるのです。

〔たとえば〕ガンで亡くなるという場合においても、90歳の年代にガンで死んだら、それは〔良い死に方〕のほうに近いわけです。

しかし、30歳でガンを患って、亡くなったとすれば、それは不自然です。なぜなら、年齢的に元気なはずの年代で死んだわけですから、それは〔悪い死に方〕に近いと考えるのです。

若い人が死ぬときには、年齢が若ければ、若いほど、不自然です。本来は死ぬ年齢ではないのです。

自殺とか、殺されるほど悪い死に方ではないですが、どちらかといえば、悪い死に方に近いといえます。

自然災害死で、80歳とか90歳の場合であれば、そこには老衰の条件が入ってくるわけです。

〔たとえば〕災害が来なくても、寿命ということであれば、1～2年の誤差と考えることができます。それゆえ、〔良い死に方〕のほうに近いです。

〔良い死に方〕と〔悪い死に方〕の判別には、上記を参考にして考えください。

『天胡星』は病人の星ですが、〔自殺〕という死に方、
〔殺す側と殺される側〕〔良い死に方〕〔悪い死に方〕
ということで、話が進んでしまいました。

『死』はどなたも通る道ですから、避けることはできません。

それゆえに、〔良い死に方〕をするのが肝要です。といえるのです。

『天胡星』は〔死の病の時代〕この世（^{げんせ}現世）で最後の星なのです。

『天胡星』 終わります。

⇒ ^こ此の世の最後 ^よ『天胡星』終わりました。
つぎの時代〔あの世〕へ向かいます。

算命学は、死んで終わりではないのです。
死後の時代があると考えています。

死後の世界も『三つの段階』に分類します。

死んだ^{あと}後に、三つの時代があります。

なぜそのように考えるのか——それはどういう仕組み
になっているのか……死んだ後はどうなっているのか、
これらのことについて、段階的に話を進めます。

⇒ 死後の時代の星は3つあります。

天極星（てんきょくせい） 死人

天庫星（てんこせい）は（てんくらせい）と読んでください。

天馳星（てんそうせい）

「死人」「入墓 にゆうぼ」「彼の世 あのよ」の3つです。

算命学は、死後の時代を三つに分けて考えています。

【天極星】^{しにん} 死人の星

【天庫星】^{にゆうぼ} 入墓の星

【天馳星】^{あよ} 彼の世の星

三つの時代の違いを理解する必要があります。

そうしないと、各星の意味合いを理解できないことになります。

^{あよ}彼の世と^{こよ}此の世の^{そんざい}存在を算命学は考えています。

宿命（1）

あの世

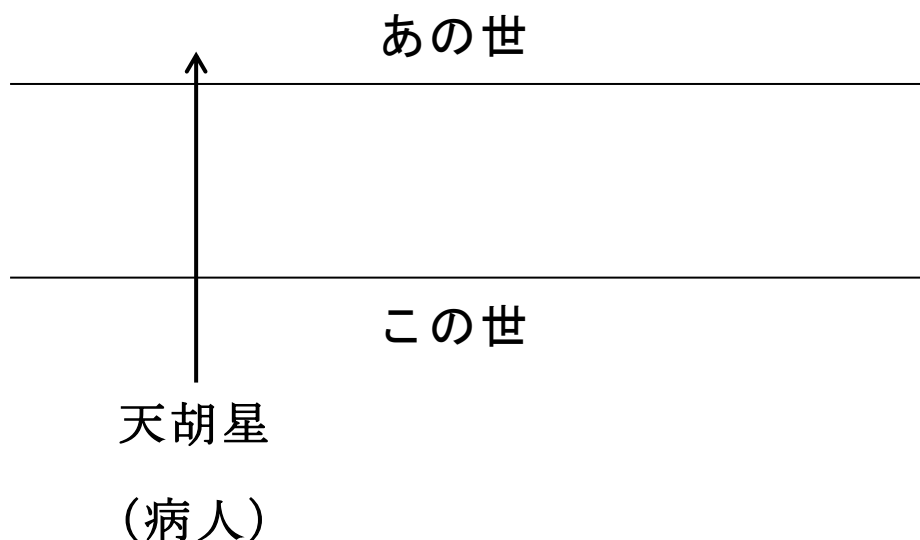
この世

この世（現世）最後の時代は、死の病に臥した病人の星
『天胡星』でした。

もともとは陰陽論です。

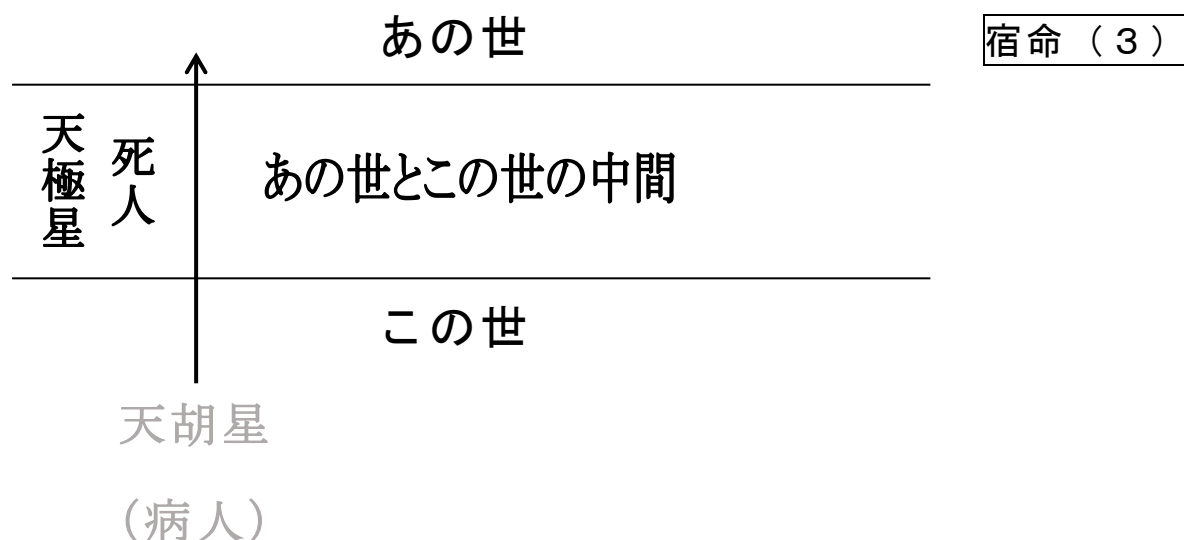
万物は必ず（陰）と（陽）があるという考え方から、
あの世とこの世があると考えています。

宿命 (2)



この世で死ぬと、あの世に行くわけですが、この世で死んで、あの世に行くときに、いきなり——あの世へ行くのではなくて、この世 と あの世の中間の時代があると考えています。その時代が『天極星』です。

天極星は、あの世とこの世の間になります。



あの世とこの世の中間の時代を『死人しにんの時代』と名づけています。⇒ **宿命(3)**

この世では、どの人でも、肉体と精神を備えていますから、“この世で死ぬ”のは“肉体が死ぬ”という意味です。

肉体が死んだ後のちに、精神はあの世へと向かうのです。——肉体が死んで、精神だけになった状態を『魂たましい』と呼んだりしますよね。

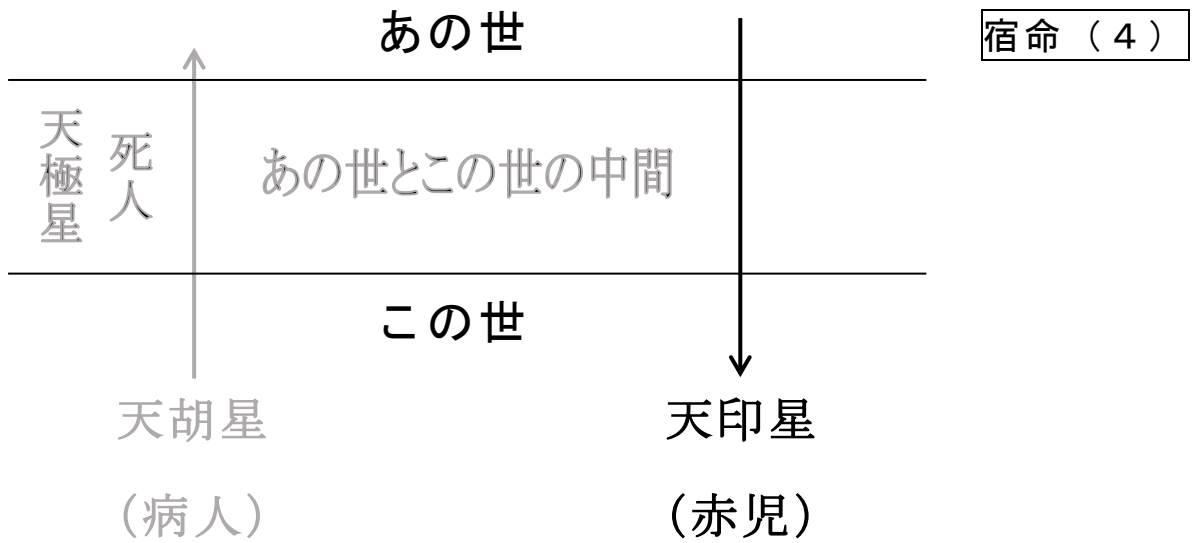
この世で肉体が死んで、霊魂れいこんは肉体から解き放たれてあの世へ向かいます。

そこには、空間(中間)の存在がありますから、天極星の時代は、肉体が死んで、解き放たれた魂が、この世とあの世の中間を通過してゆく時代です。

言葉を換えれば、魂が空間を“さ迷まよっている”そういう時代があると考えています。

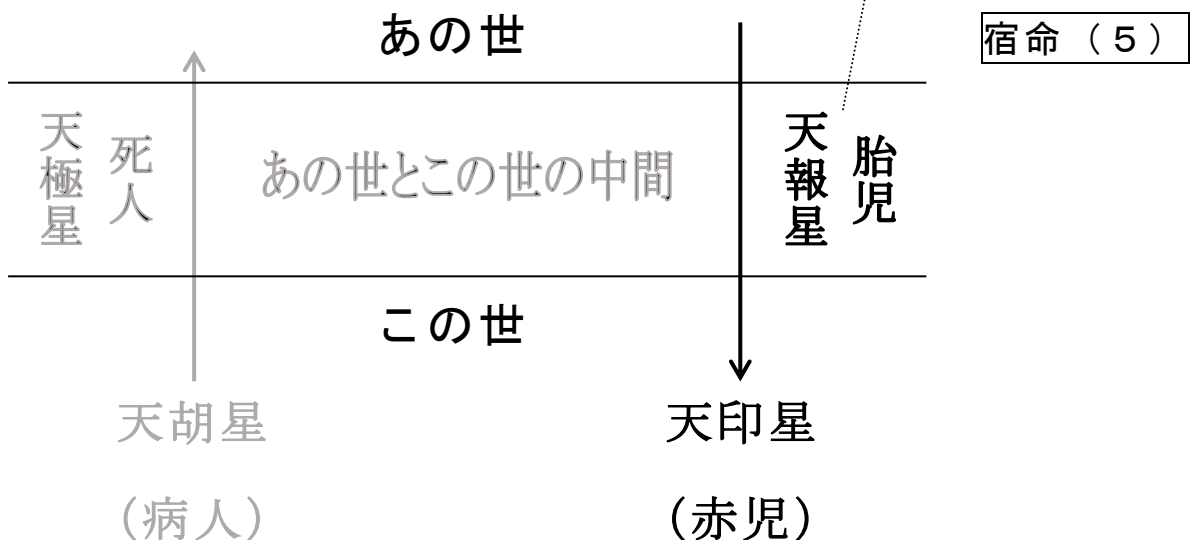
なぜこのように考えるかといいますと、逆に、この世に生まれて来るときのことを考えてください。

この世に生まれると、最初は誰でも赤ん坊です。➡



赤ん坊の天印星の時代が、この世での出発になるわけ
 です。しかし、いきなり赤ん坊から始まるのではなく
 て、赤ん坊の前の段階があります。

『十二大従星』の1番初めに出てきた天報星の時代
 (胎児の時代) があるわけです。



どなたでも、この世に生まれてくる前は、胎児だったはずですよ。

胎児の時代を通らないと、この世には生まれることはできないという事実があります。

そうしますと、胎児はどういう存在なのかといえば、胎児はこの世に生まれる前ですから、まだ、此の世の人間ではないのです。

それでは胎児は彼の世の人なのかといえば、彼の世の人になっていないはずですよ。

母親のお腹のなかで育まれているわけですよ。

まだ……〔この世にはでて来ていない〕そういう意味で〔胎児はあの世とこの世の中間の存在〕だといえるのではないだろうか、そのように算命学では考えているのです。

胎児は生まれる前なので、この世の人ではない、しかし、あの世の人でもないわけですよ。

『天報星』は彼の世と此の世の中間の時代ですよ。

当然ですけど——この世に『天印星』として生まれるときに、『天報星』の時代を通らないと、この世には生まれて来られないという意味合いから、死んで行くときにも、彼の世と此の世の間を通って行かないと彼の世に到達することはできない。と算命学は考えているのです。

それゆえに、死ぬときにも、あの世とこの世の間を通過している、あるいは、彷徨っている——そういう時代があり、その時代を死人の時代として『天極星』と名づけたわけです。

この部分は仏教とおなじような考え方をしています。

仏教では、49日間は死者の靈魂が辿り着くところが、決まっていなくて、人が亡くなってから、49日間経たなければ、お墓に埋葬しません。

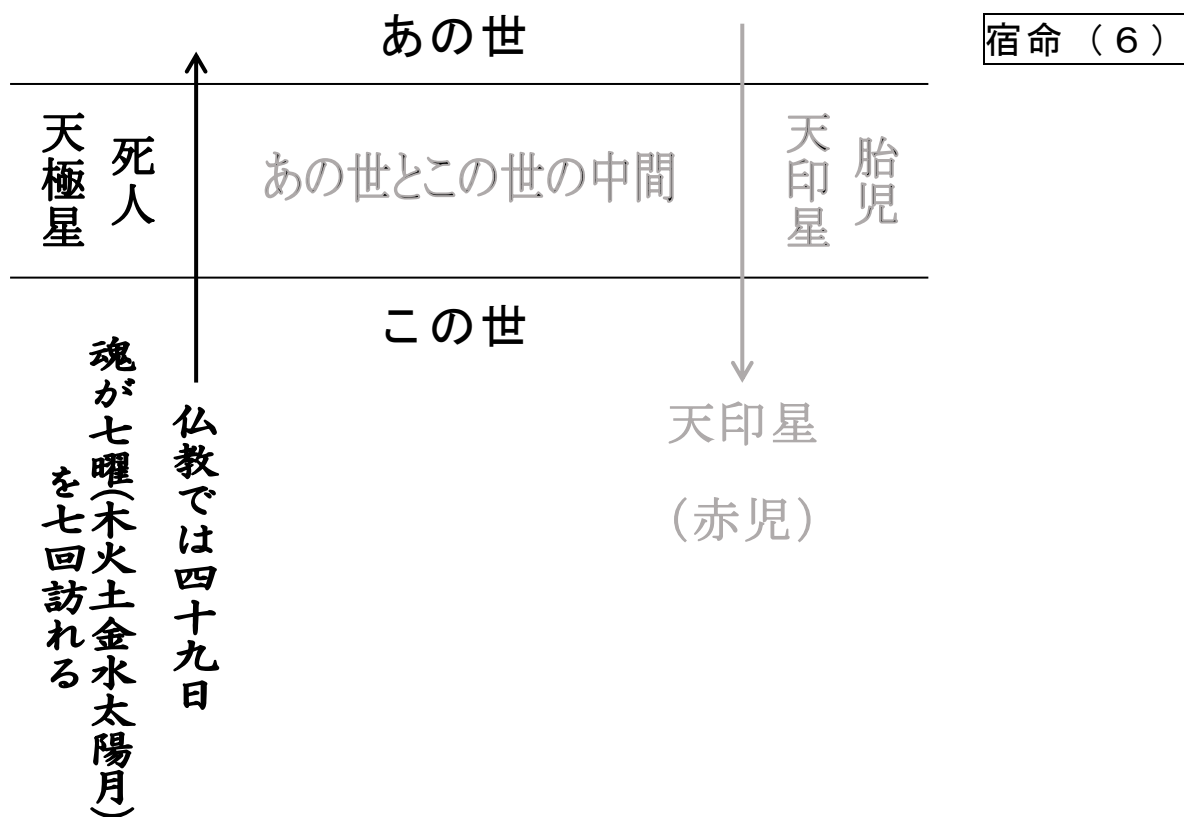
この49日には、追善のために人の死後、七日、七日に忌日（きにち）があり、初七日（しよなぬか）、そして14日目というように、七日目ごとの忌日には、僧侶を招いて法要をしたわけです。

そして、49日経てば、あの世に行き着いて成仏するとみなして、お墓に埋葬するわけです。

☞（木火土金水）の各惑星に（太陽）と（月）を加えて、七曜しちようといますが、魂が七曜を七回訪れます。魂が、一日一つの星を巡るために、魂が宇宙空間を彷徨ほうこうしているわけです。彷徨＝さ迷う

人間の魂は死後、〔例えば〕今日は木星を訪れて、つぎの日には火星を訪れた、つぎの日には土星を訪れた、というように太陽と月まで巡めぐって、一周するのに七日間かかるわけです。

宇宙空間を彷徨さまよって、それを7回位繰り返すと49日間です。

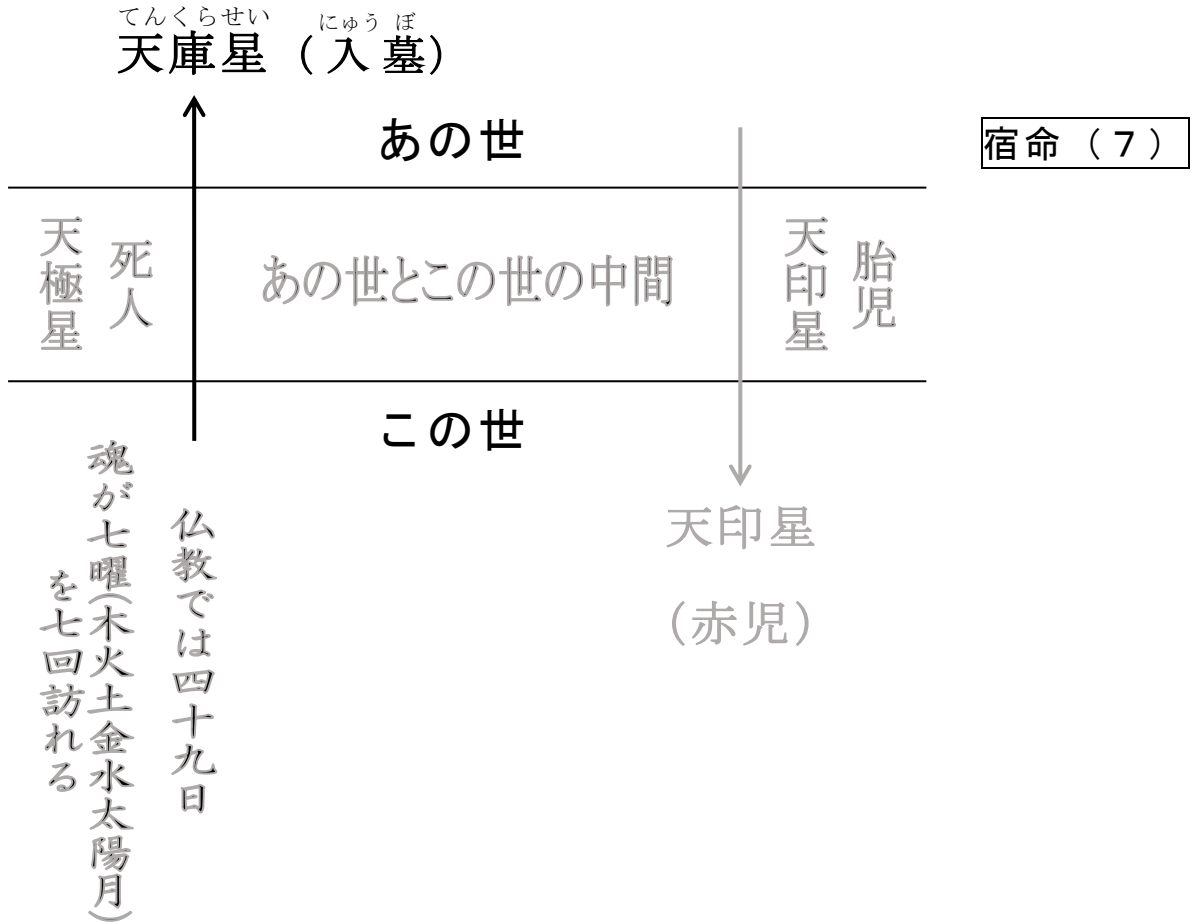


仏教では四十九日 を経てあの世に到着したことを、成仏したとして、お墓に埋葬するわけです。

算命学の場合は、あの世とこの世の間を“さ迷う”期間の日数を 49 日と限定して考えていません。

人が死んだ後に、宇宙空間を魂がさ迷う期間があって、その時代を通過して、あの世に到着する。という考え方は、仏教も算命学もおなじのようです。

算命学は、成仏する時代は『天庫星』としてしています。



『天庫星』を(てんこせい)と呼称してもよいのですが、病人の星も『天胡星(てんこせい)』です。それゆえに――

『天庫星(てんくらせい)』
 『天胡星(てんゆめせい)』

左記のように呼称します
 はっきり区別できます。

あの世へ到着した時代は『天庫星 てんくらせい』です。

『入墓の星』ともいいます。

彼の世と此の世の空間をさ迷っている期間が——実際には、どのくらいの日数なのかということについては、

『天極星=死人』は、此の世の人ではありませんので、此の世（現世）の何日とか、何ヶ月とか、その日数に、
当て嵌めることはできないわけです。

それゆえに、算命学は、空間をさ迷う日数は、人によって異なると考えています。此の世とあの世の空間をすんなり抵抗なく通過して、彼の世に到達できる魂もいれば、なかなか到着できない魂もいるわけです。

もうかなり長い間、空間をさ迷わなければならない、そういう魂もあります。と考えています。

あの世に到着することができずに、消滅してしまう魂も有り得るとも考えています。

『天胡星』で書きましたが、自殺とか、殺されて死ぬ、そういう悪い死に方をした場合は、なかなかあの世へ到着できなくなります。という意味なわけです。

それは『天報星』の時代とおなじで、この世に生まれるときには、胎児の時代を通らなければなりません。

胎児の時代を通らなければ、この世に生まれていないのです。しかし、その胎児が、必ず、この世に生まれて来るとは決まっていません。死産で消滅してしまう胎児もいるわけです。流産してしまう場合もあります。

^{だたい}墮胎されてしまうこともあるわけです。

そうしますと、仏教はこの天極星の時代を通過して、あの世に^{たましい}魂が^{たど}辿り着いたので成仏したとして、お墓に埋葬されることとなります。

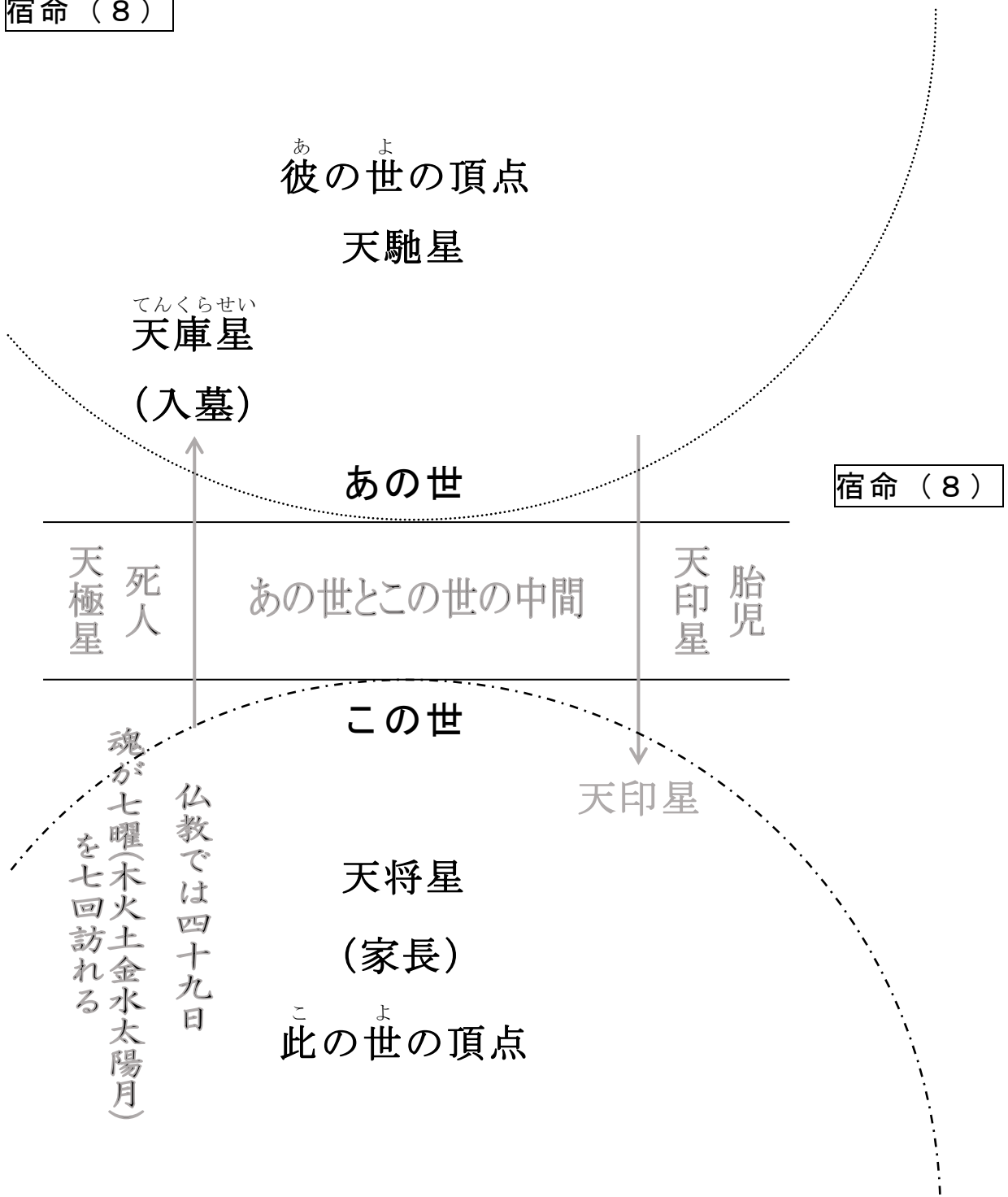
算命学は **宿命(7)** のように、お墓に埋葬される時代の星を『^{てんくらせい}天庫星』と名づけました。

『天庫星』を〔入墓の時代〕ともいいます。

そして、此の世には『^こ天将星』の時代（家長の時代・人生の頂点の時代）がありましたように、^あ彼の世においても頂点があるはずだと考えまして——彼の世の頂点の星を『^{てんそうせい}天馳星』と名づけました。

つぎにページ **宿命(8)** を見てください。

宿命（8）



〔天将星〕（家長の星）は此の世の頂点です。

彼の世にも、頂点というべき時代があるはずだと考えたのです。その時代を“天に馳せる”と書きまして〔天馳星〕と名づけました。

彼の世の時代の頂点は『天馳星』です。

⇒ 算命学は、あの世とこの世の仕組みを、つぎのように考えているのです。

これは理論的に考えると、このような仕組みになっているはずだ……ということでありまして、それを確かめる術すべ（なすべき手立）は、死ななければ不明です。

不明ですけど、この世に生まれて来るときの状況に、陰陽論の考え方を当て嵌めて考えると、つぎのような仕組みになっている。と、算命学では考えています。

これは余談ですけど――。

テレビで霊媒師の人が出てきて、死んだ人の魂を呼びだして、「いまこのようにおっしゃっています」とか、「子孫に対してここに気をつけなさい」と言っているとか、このような放送を観たことがあると思いますが、あのようなことは有り得ると考えています。

有り得ますが、ただし――呼び出すことが可能な魂は天極星の時代にいる魂れいこん（靈魂）に限ると考えています。あの世に到達する前の“魂がさ迷っている”天極星の

時代にいる魂であれば、この世の人が呼び出すことは可能だと考えています。

なぜかといえば——このことは、胎児の状態を考えることでわかると思います。

この世の人間が胎児に直接^{さわ}触ることは出来ませんが、
現在^{いま}は超音波で男女の性別もわかりますし、あるいは何らかの方法で、ここに手がある、足がある、とか、いま、胎児がどういう状態になっているのか、という情報を得る方法があるそうです。

「胎児は順調に育っていますよ」とか、「胎児は双子ですよ」とか、胎児のすべての状態はわからないとしても、ある程度はわかりますよね。

でも、胎児の前の姿（あの世の姿）が、どんな姿をしていたのか、それは知る方法がないはずです。

現代医学で、どのような胎児なのか、ある程度は知ることが出来ます。しかし、その胎児が、胎児になる前には、どこにいたのか、あの世にいたのか、それともほかの惑星にいたのか——宇宙空間にいたのか、何を

していたのか、それは知る手だてないのです。

それとおなじでして、死んだ後も、この世とあの世の中間にいる魂であれば、その魂は、いま、どのような状態におかれているのか、それを知るすべはあるであろうと考えているのです。

しかし、あの世に到着してしまった、成仏した魂が、いま、どんな状態で、どんな場所にいるのか、それは知る方法はないと、算命学は考えています。

たまに、霊媒師の人が――「私の死んだ母親を呼び出してください」といわれて、呼び出したら、「来ました」と、「今どこにいるのかしら……」と訊くと、「いまはあの世で幸せに暮らしていますよ」などと、応えたりすることがありますけど、あのようなことは有り得ないとしています。

あの世で暮らしている魂が、どんな状態なのか……、この世にいる人間は知る方法ないわけです。

胎児が胎児になる前は……何処で何をしていたのかを知る方法ないのです。

算命学は、死んであの世へ行ってしまうと、この世のどんな靈感のある人でも、情報を得る方法はないとされています。

でも、この世とあの世をさ迷っている時代であれば、靈感がある人、非常に感の鋭い人が、その魂を感じることは可能であるとも考えています。

ただし、この世と彼の世の空間をさ迷っている ^{たましい}魂は _{ふゆうれい}浮遊霊なので、悪い死に方の霊魂だと言い切れます。

【天極星】 死人の星 ⇒ この世とあの世の中間の時代

【天庫星】 入墓の星 ⇒ 成仏した時代

【天馳星】 彼の世の星 ⇒ あの世の頂点の時代

天馳星（あの世の星）は、あの世の頂点の時代と考えておいてください。

【初年】 4 5 回目【十二大従星力学⑤】 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】 4 6 回目【十二大従星力学⑥】です。